



## 内モンゴルにおけるモンゴル民族と漢民族の通婚関係 オラド後旗・Mガチャーの調査から

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 白 福英  |
| 雑誌名 | 東北アジア研究   |
| 号   | 25  |
| ページ | 25-44   |
| 発行年 | 2021-03-18  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10097/00130821">http://hdl.handle.net/10097/00130821</a> |

## 《研究ノート》

# 内モンゴルにおけるモンゴル民族と漢民族の通婚関係

——オラド後旗・Mガチャーの調査から——

白 福英\*

Intermarriage between Mongolian and Han in Inner Mongolia:  
A Case Study of M Village in Urad Rear Banner

BAI Fuying

### 要旨

本稿は、現代内モンゴル・オラド後旗の牧畜を生業とする M ガチャーにおけるモンゴル民族と漢民族の通婚を通して、モンゴル民族と漢民族が共存する現場における民族間関係を考察するものである。先行研究において今まで論じられていなかった牧畜地域を対象とし、モンゴル民族と漢民族の通婚が牧畜にどのように関係しているのかを、本稿の事例を通して明らかにした。そして、牧畜地域におけるモンゴル民族と漢民族の関係は、家畜を介した地縁的連帯が形成されていることを指摘した。

キーワード : 内モンゴル、牧畜、モンゴル民族、漢民族、通婚

Keywords : Inner Mongolia, Pastoralism, Mongolian, Han, Intermarriage

### 目次

1. はじめに
2. 牧畜を生業とする漢民族
  - 2.1 オラド後旗の地域的特徴
  - 2.2 中華人民共和国成立以降の漢民族の移住の歴史と社会的要因
  - 2.3 モンゴル民族と漢民族が混住する M ガチャー
3. M ガチャーにおけるモンゴル民族と漢民族の通婚
  - 3.1 M ガチャーにおける通婚パターン
  - 3.2 モンゴル民族男性と漢民族女性の通婚
  - 3.3 漢民族男性とモンゴル民族女性の通婚
  - 3.4 「混血」男性と漢民族女性の通婚
  - 3.5 「混血」男性とモンゴル民族女性の通婚
4. まとめと考察
5. おわりに

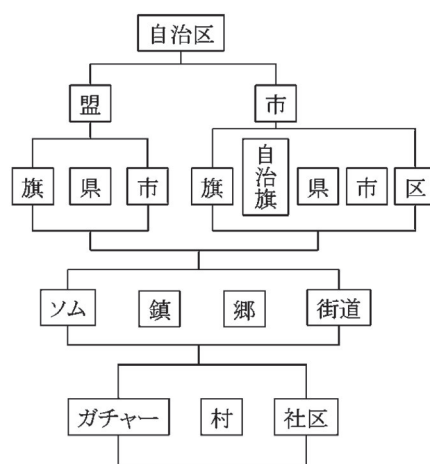
---

\*国立民族学博物館

## 1. はじめに

本稿は、現代内モンゴル・オラド(注1)後旗の牧畜を生業とするMガチャー(図1参照)におけるモンゴル民族と漢民族の通婚を通して、モンゴル民族と漢民族が共存する現場における民族間関係を考察するものである。

多民族国家である中国においては、漢民族と少数民族間の関係は国家の安定や国家統合につながる重要な意味を持っているため、これまで盛んに研究されてきた。1949年の中華人民共和国の成立から1980年代にかけては、歴史的視点からの議論が主流であり、多くの研究蓄積が残されている[翁(主编)1984]。これまでの民族間関係を扱った研究の中で影響力があるの



(図1) 内モンゴルにおける現行行政機構

は、費孝通が提唱した「中華民族多元一体論」である[費1989]。この理論については、中国国内外において政治的、学術的な面から様々な議論がなされ、高く評価されつつも、いくつかの問題点と検証すべき点が指摘されている。評価の一つは、西澤が指摘するように民族間関係において新たな視点と課題を提起したことである[西澤2004]。それは、漢民族同様に少数民族も漢民族を同化吸収しているという指摘である。

モンゴルと漢という2つの民族は長い歴史の中で敵対関係にあったため、ともすれば両民族の関係は二項対立的な関係に還元して解釈される傾向がある。しかし生活実践の次元では、この傾向と相反するように、モンゴル民族と漢民族の通婚が普遍的な社会現象となっている。李の研究によれば、中国において少数民族と漢民族の通婚率は81.58%であり、少数民族同士の通婚率は18.42%である。モンゴル民族の他民族との通婚率は41.02%におよび、漢民族との通婚率が37.49%を占めている[李2004: 69-70]。

通婚は、内モンゴル社会研究においてあまり重視されてこなかったテーマであるが、1980年代以降注目されるようになった。モンゴル民族と漢民族の通婚の現状に関する研究は、主に、呼和浩特市と赤峰市を調査対象としている。呼和浩特市における両民族の通婚を扱った研究として、納日碧力戈(1991)、納日碧力戈・王俊敏(2000)、茉妮(2008)らの論文が挙げられる。赤峰市においては、馬戎・潘乃谷(1988)、包智明(1991)、鄭国全(2004)、オンドロナ(2006、2007)らの研究がある。ただし、これらの先行研究には地域的な偏りがみられる。また、これらの先行研究の多くが共通して指摘しているのは、都市や農耕化が進んだ定住村落において、人口の多数を占める漢民族のモンゴル民族への影響によって両民族間の生活習慣などの差異が縮まっていることと、民族優遇政策が通婚を促していることである。換言すれば、通婚が生じる社会的諸要素が論じられているのであるが、これらの先行研究では研究手法として主に統計データやアンケート調

査など量的アプローチが用いられる一方で、質的アプローチに欠けているという問題がある。

中国において漢民族と少数民族間の通婚といえば、一般的に「民族融合」、「漢化」といった概念と結び付けられがちである。先行研究においても、このような考えが読み取れる。例えば、馬戎・潘乃谷は、赤峰市における調査を通してモンゴル民族と漢民族の通婚は、「民族間の差異が縮まり、民族間関係が改善された結果である」[馬・潘 1988 : 79]と結論付けているが、これに対して納日碧力戈は、呼和浩特市におけるモンゴル民族と漢民族の通婚においては、民族の違いに起因する家庭問題が生じていることを指摘している。オンドロナは前者に対して、「族際婚姻を民族融合の指標として認識している」と批判し、後者を、「族際婚姻を民族融合の指標のみからとらえる研究上の偏りから脱し、族際婚姻を客観的にとらえることに成功した」[オンドロナ 2006 : 106-107]と、評価している。オンドロナが、通婚当事者の客観的文化要素だけを重視するのではなく、主観的意識をも統合して「混血者」にみられる民族意識の重層性、可変性を論じている点は評価できる。ただし、調査地の選定について、オンドロナが、モンゴル民族と漢民族の人口割合、生業形態を考慮した内モンゴル全体の縮図ともいえる地域であると断言し、調査地の一般化を図ろうとしている点には疑問が残る。モンゴル民族が多数を占める農耕地域のガチャー、および漢民族が多数を占める牧畜地域のガチャーがオンドロナの設定する調査対象から外れていることは問題である。

したがって、本稿では、漢民族が多数を占める牧畜地域の M ガチャーにおけるモンゴル民族と漢民族の通婚を通して、モンゴル民族と漢民族が共存する現場における民族間関係を考察する。

第 2 節では、まず、オラド後旗における牧畜に従事する漢民族が発生した社会背景を概観し、M ガチャーの成り立ちを紹介する。次に、第 3 節で、M ガチャーにおけるモンゴル民族、漢民族の通婚パターンを整理した上で、当事者の語りを中心に記述する。その結果を踏まえ、第 4 節で、通婚が牧畜をめぐる両民族の関係にどのように影響しているかについて考察する。そして、最後に本稿が提示した事例の位置づけと今後の課題に言及する。

なお、本稿で取り上げる事例は、筆者が 2013 年 8 月 24 日～9 月 24 日、2015 年 7 月 15 日～10 月 15 日、2016 年 6 月 19 日～8 月 19 日の 3 回に渡って実施した現地調査に基づくものである。調査期間中、聞き取り調査はモンゴル語と漢語およびその方言として位置づけられる河套方言で行った。調査地である M ガチャーを特定できないように、あえて旗との位置関係図に示していない。また、モンゴル民族と漢民族の婚姻について通婚という用語を使用する。この場合のモンゴル民族は「純粋」(注 2)なモンゴル民族と戸籍上のモンゴル民族を含む。

## 2. 牧畜を生業とする漢民族

### 2.1 オラド後旗の地域的特徴

オラドとは、オランの複数形で、「職人たち」(注 3)という意味があり、モンゴルの一つのアイマグ(部族)の名称である。チンギス・ハーンの弟であるハボト・ハサルの末裔として知られてい

る。この地域のモンゴル民族は、歴史上の部族名を冠してオラド・モンゴル人と呼ばれる。オラド後旗という地域名は、清朝の盟旗制度の名残によるものである。オラド後旗が成立するまでには、幾度もの行政区分の変更が繰り返された。1970年に、現在の領域が確定され、その当時は<sup>チョグ</sup>潮格旗という名称だったが、1981年に、オラド後旗と改称されて現在に至る[m.batusüke2004: 252-254]。

オラド後旗は内モンゴルにおける牧畜地域に属する[馬 1997: 379]。バヤンノール市に管轄され、東経 105° 8' 20" ~ 107° 38' 20"、北緯 40° 41' 30" ~ 42° 21' 40" の間に位置する[図 2 参照]。総面積は約 2.5 万 km<sup>2</sup> であり、北部はモンゴル国と隣接している。陰山山脈の西端である狼山は旗の南部を横切っており、河套平原と北部の丘陵、高原や荒漠草原の分水嶺となっている。2013 年の統計データでは、年間平均気温は 9.1℃ であり、年間降水量は 99.8 mm である[『烏拉特后旗地方志』办公室(編) 2013: 57]。オラド後旗は中温帯高原大陸性気候に属し、気温の



(図 2) オラド後旗の位置

年較差が大きく、乾燥して風が強い、雨量が少なく、蒸散量が大きいのが特徴である[『烏拉特后旗志』编纂委员会 1992: 3, 76]。気温と年間降水量から見てもこの地域は、農耕に適さないことが分かる。このような地理的環境によって陰山山脈の北側には主に牧畜が営まれ、南側には農業が行われている。

オラド後旗における牧畜の形態は、内モンゴルに広くみられる定住牧畜である。1998 年の「双権一制」(注 4)によって牧草地の使用権が個人に 30 年の契約で与えられた。その当時近隣同士が話し合い、小規模の移動放牧を行っていた。しかし、2003 年に、環境保全対策として「退牧還草」政策(注 5)が打ち出された後、状況が一変した。この政策によって生じた牧草地の補助金をめぐって近隣同士が裁判にもつれ込むことが後を絶たなくなり、回避策として自分に割り与えられた牧草地を有刺鉄線で囲むような事態に至った。その結果小規模の移動放牧さえ不可能となり、自分の牧草地の範囲内での日帰り放牧が牧畜の基本形態となった。

オラド後旗においては、漢民族が多数を占めている。総人口 63,908 人の内、漢民族は 46,535 人、モンゴル民族は 17,058 人、その他のダフル族、回族、エヴェンキ族、チベット族、朝鮮族が合わせて 317 人である[『烏拉特后旗地方志』办公室(編) 2013: 346]。日常言語としては、モンゴル語のオラド方言と中国語の河套方言が使用されている。高齢者を除けば、モンゴル民族はほぼ

バイリンガルであるのに対し、漢民族は高齢者ほどモンゴル語が上手で、それ以外の人はモンゴル語が少し聞き取れる位である。牧畜に従事する漢民族の中でモンゴル語を自由に操る人もいるが、それほど多くはない。

2003 年まで旗政府所在地は山脈の北側の賽烏蘇鎮<sup>サインソフ</sup>にあったが、2004 年に山脈の南側の巴音宝力格鎮<sup>バインボラグ</sup>に移転した。現在、旗政府所在地の町は東昇廟である。2016 年現在、オラド後旗は 3 つの鎮と 3 つのソムを管轄している。上記の人口統計から分かるように旗において漢民族はモンゴル民族よりはるかに多いが、ガチャーレベルでの人口割合でみればモンゴル民族が多いガチャーもある。オラド後旗が管轄する殆どのガチャーはモンゴル民族と漢民族が混住しており、本研究の研究対象である M ガチャーも例外ではない。

このように山脈によって生業が分かれた地理的条件と、モンゴル民族と漢民族が混住し、共に牧畜を営むという現象は、この地域の特徴である。

## 2.2 中華人民共和国成立以降の漢民族の移住の歴史と社会的要因

次に、漢民族はいかにしてオラド後旗へ流入し、モンゴル民族と漢民族の混住という社会現象をもたらしたか、その歴史的背景と社会的要因を探っていく。

オラド後旗への漢民族の流入は、清朝乾隆年間(1736-1795)まで遡ることができるが[『烏拉特后旗志』編纂委員会 1992 : 56]、本稿では 1949 年の中華人民共和国成立以降にオラド後旗に流入した漢民族を扱う。というのは、清朝時代から連綿とこの地域に流入した漢民族の多くは、山脈の南側の河套平原に定住して農耕に従事し[『烏拉特后旗志』編纂委員会 1992 : 48]、本稿の研究対象と異なるからである。河套平原における彼らの農地の拡大は牧草地の減少と自然環境の破壊など、オラド・モンゴル人の社会に大きな影響を与えたが、空間的にオラド・モンゴル人と一定の距離が置かれており、モンゴル民族と漢民族の混住には直接結びつかなかった。

内モンゴルへの漢民族の最も顕著な流入は、1950 年半ばの自然災害による自発的移民と、それに続いて 1958 年に全国的に展開された大躍進政策(注 6)の結果生じた。大躍進時代には「辺境地域支援」政策(注 7)によって、従来なかった規模で大量の漢民族が内モンゴルへ流入した[リンチン 2015 : 170-171]。この時期に、オラド後旗においても知識青年(注 8)だけではなく、1950 年代以降の自然災害や 1960 年代前後の大躍進の災難を被って、飢饉に見舞われた大勢の甘肅省出身の漢民族が山脈の北側に流入してきた[『烏拉特后旗地方志』編纂委員会 1992 : 48]。これを契機に漢民族が、モンゴル民族と同じ空間に生活するようになり、さらに放牧技術を身につけ、結果的にモンゴル民族と漢民族が混住するようになった。内モンゴルへの甘肅省からの漢民族難民の流入については、オラド後旗以外にも、児玉が甘肅省に隣接するアラシャー盟・エゼネ旗の事例について報告しており、大躍進政策下で 1958 年に人民公社が設立されたのに加えて 1960 年に大躍進失敗による大飢饉で漢民族人口が著しく増加し、その後の漢民族人口流入継続による民族人口比率の逆転をもたらす契機となったことを指摘している[児玉 2012 : 140]。

漢民族が牧畜を始めざるを得なかった社会背景として、上述の自然災害や政策上の原因以外に



も、以下の点が挙げられる。一点目は、1960年代の初めにソ連と中国の関係が悪化し、ソ連が1950年代に中国政府に貸した貸付金の返済を迫ったことである[陸 2009：482-483]。そのために中国は国そのものが貧窮化し、自然災害や大躍進失敗後の飢饉に十分な対応ができなかった。二点目は、オラド後旗における労働力の不足という問題である。1950年前後当時オラド後旗の人口は極端に減少していた。清朝初期に、オラド後旗におけるモンゴル民族の人口は約4,500人だったが、歴代の封建王侯の過酷な統治と、軍閥や土匪による略奪、疫病の流行などによって、1947年には195人まで減少していた[『烏拉特后旗地方志』编纂委員会 1992：48]。三点目は、1958年にオラド後旗において社会主義改革の一環として2つの公私共同経営牧場が建設されたことである。この2つの牧場には飼料基地が設けられていた。牧場では、家畜の放牧を手伝う労働力が不足していて、飼料基地では飼料を栽培する技術員が必要とされていた。その労働力と技術員は、主に農耕民であった漢民族移住者によって構成され、当時は「開墾隊」と呼ばれていた。Mガチャーの前身となるのはL公私共同経営牧場である。それは、13世帯の裕福な牧畜民の所有する家畜と巴音善岱廟<sup>バインシャンドイ</sup>が所有する家畜の一部が集められてL公私共同経営牧場の資産とされた。

この三点が重なり、そもそも農耕民であった漢民族が移住先であるオラド後旗において牧畜への従事を余儀なくされた。地方誌や先行研究では、この時期の流入者について、「大量の甘肅省出身の漢民族難民」という漠然とした表現が使われており、その実態を把握するための公的資料や情報が限られている。

次は、モンゴル民族と漢民族が混住するMガチャーを概観してみよう。

### 2.3 モンゴル民族と漢民族が混住するMガチャー

まず、MガチャーとL牧場、L飼料基地の関係を整理しておきたい。L牧場は三つのガチャーから合わせて2,300 km<sup>2</sup>ほど面積の土地を譲ってもらって開設されたものである。この2,300 km<sup>2</sup>の土地の中の川沿いの平坦な土地に飼料基地が置かれていた。この牧場は行政単位としてソムに相当する性格を持つものであり、病院、供銷社(注9)、郵便所、小中学校、派出所、役所などが開設されていた。飼料基地で栽培された家畜飼料はL牧場内で消費されていた。文化大革命終結後の1980年にL牧場は飼料大隊と牧畜大隊に分かれた。飼料大隊は農業を営んでいる点で、牧畜大隊と異なっていた。また、飼料大隊は居住空間においても集落的な性格を有していた。そして改革開放政策が始まった1984年の人民公社の解体時に、飼料大隊と牧畜大隊は隣接するソムに合併された。これを契機にL牧場はソム相当の位置づけからガチャー相当へと降格した。それに伴って小中学校、派出所、役所などが廃止された。そして飼料大隊はLガチャーに、牧畜大隊がMガチャーに改称された。飼料基地に技術員としてきた漢民族の一部とその家族はLガチャーの成員となり、かつて裕福だったモンゴル民族牧畜民の一部と彼らの放牧を手伝っていた労働力としての漢民族の一部がMガチャーの成員となった。また、他のガチャーへ移動した漢民族もある。

Mガチャーはオラド後旗の西北部に位置し、北部はモンゴル国のウムヌ・ゴビ県と境界を接し、

南部の他ガチャーとの境界まで南北におよそ 100 km の距離がある。牧畜を生業としており、総面積は 2,100 km<sup>2</sup> である。およそ 1,600 km<sup>2</sup> の牧草地は、ガチャー成員に分配されており、残りは集団牧草地として位置づけられている。地形は、山岳と砂漠草原が中心である。この自然環境は、平坦な地形と豊富な水や牧草が必要なウシ、ウマの飼育にあまり適さないために、M ガチャーでは、乾燥に比較的強いヤギとラクダが多く飼育されている。住居形態は、国境の近くでは、家屋と家屋は 15 ～ 20 km 離れており、南に行くほど家屋間の距離が縮まって 3 ～ 5 km ほどになることが特徴である。

2015 年の時点で、M ガチャー総人口は 416 人、世帯数は 123 (注 10) である。その内訳は、モンゴル民族が 141 人、漢民族が 275 人である。漢民族 275 人の内には、「掛名戸」(注 11) という戸籍を持つ漢民族世帯の人々も含まれている。彼らは大体 13 世帯で 40 人ほどと推測される。123 世帯の内の 50 世帯が M ガチャーに常住しており、43 世帯は自主的に補助金をもらって旗の域内あるいは域外に移り住んでいる。また、17 世帯は生態移民(注 12)として登録されている。M ガチャーは、5 つの組に分かれて管理されている。ガチャー長は漢民族で、党支部書記がモンゴル民族である。5 人の組長の内、3 人は漢民族、2 人はモンゴル民族である。

M ガチャーの大部分には電線が通っていないが、国境にいたる舗装された道路付近に住んでいる世帯に限り道路沿いの送電線から電氣を得て利用している。それ以外の世帯はほぼ太陽光発電パネルと蓄電池を使用している。それらで発電して貯めた電氣で冷蔵庫も、洗濯機も使用できるため、現地の人々は都会とあまり変わらない生活をしている。パラボラ・アンテナやスマートフォンも普及している。人々は液晶テレビ、スマートフォンを利用して天気予報を入手して放牧に活用している。軽自動車とバイクは不可欠で、バイクは家畜の放牧に使われ、軽自動車は日用品購入のための街への移動や、子供の学校への送迎といった用途に利用されている。

人々の主な収入源は「退牧還草」政策による牧草地の補助金と家畜の生産物だが、もう一つの収入源は、沙漠の人参と呼ばれている肉蓯蓉(学名: *Cistanche deserticola* Ma) (注 13) である。肉蓯蓉は、ササボク(注 14)の根に寄生する貴重な生薬である。ササボクは灌木の一種であり、砂丘を固定する働きがあり、砂防林として現地の人々に大切にされている。ササボクはラクダに定期的に食べられないと枯れてしまう性質を持っており、それゆえに、現地においてササボク、肉蓯蓉、ラクダは「ゴビの三つの宝(gobi-yin gurban erdeni)」と呼ばれて珍重されている。

ここまでオラド後旗の地域の特徴、牧畜を始めた漢民族が発生した社会背景と M ガチャーが成立した過程について概観した。次節では、モンゴル民族から一般的に否定的なイメージで捉えられがちな通婚が、両民族が共存する M ガチャーにおいてどのように展開されているかを具体的な事例を挙げながら分析していきたい。

### 3. M ガチャーにおけるモンゴル民族と漢民族の通婚

近代国家の枠組で語れるモンゴルと漢という民族籍は、当事者が置かれた文脈において一つの



重要な意味を持つカテゴリーであるが、状況次第でその重要度は変化する。そのため、モンゴル民族と漢民族の関係を二項対立の構図で理解しようとすることは実態よりも先入観が先行していると言える。なぜならば、この2つのカテゴリーの間で通婚が起こっているからである。両民族間の通婚自体は内モンゴルにおいて一般的な社会現象で、Mガチャーに限る特殊なケースではないが、Mガチャーの事例は牧畜地域における両民族の関係を考える上で有効な手がかりである。

### 3.1 Mガチャーにおける通婚パターン

中国において基本的に人口は民族別に統計されている。またその前提として行政による民族籍制度がある。身分証には必ず民族籍が記載される。民族籍は、身分証に記載されている名前、性別、生年月日といったその他の事項とは違い、選択と変更が可能であるという柔軟性がある。中国では、少数民族であれば進学や出産などの面で優遇政策が受けられる。民族籍は選択できるので「純粹」な漢民族であっても漢民族と少数民族の通婚によって生まれた子どもであっても優遇政策にあずかるために少数民族を名乗ることが珍しくない。2.3で述べたように、Mガチャーにお

(表1) Mガチャーにおけるモンゴル民族と漢民族の通婚パターンと年齢

| 世帯番号 | 通婚関係<br>(男性 - 女性) | 年 齢 |    |
|------|-------------------|-----|----|
|      |                   | 男性  | 女性 |
| a    | モンゴル - 漢          | 60  | 60 |
| b    |                   | 45  | 41 |
| c    |                   | 故人  | 71 |
| d    |                   | 52  | 40 |
| e    |                   | 51  | 46 |
| f    | 漢 - モンゴル          | 47  | 41 |
| g    |                   | 43  | 41 |
| h    |                   | 36  | 35 |
| i    |                   | 不明  | 31 |
| j    |                   | 52  | 49 |
| k    | 漢・モ* - 漢          | 故人  | 50 |
| l    |                   | 47  | 48 |
| m    |                   | 42  | 故人 |
| n    |                   | 36  | 29 |
| o    |                   | 44  | 38 |
| p    | 漢 - 漢・モ           | 44  | 42 |
| q    |                   | 34  | 32 |
| r    | モ - 漢・モ           | 33  | 30 |
| s    | 漢 - モ・漢           | 37  | 36 |
| t    |                   | 36  | 34 |
| u    |                   | 29  | 28 |
| v    |                   | 27  | 25 |

出所：調査資料を基に作成。

\*父親が漢民族、母親がモンゴル民族であれば、「漢・モ」のように表記する。その逆は、「モ・漢」とする。

けるモンゴル民族の人口は 141 人と統計されているが、その中に、「純粹」な漢民族が 2 名、モンゴル民族と漢民族の通婚によって生まれた子どもが 28 名含まれている。その 28 名が全員モンゴル民族として登録されている。

異民族との通婚によって生まれた子どもを、漢語では「混血児」と呼び、蔑称として「雜種」とも呼ばれている。モンゴル語では「エルリス(erlise)」と呼んでいる。「混血」という言葉には、「純粹ではない」といった差別的な意味合いがあるが、ここでは、そういう意味を含まずに便宜上かぎ括弧つきの「混血」、「混血者」という用語を使用する。

M ガチャーにおいては、モンゴル民族同士の通婚と漢民族同士の通婚を含めて 9 つの通婚パターンがある。123 世帯の内、22 世帯がモンゴル民族と漢民族、あるいは「混血者」との通婚世帯である(表 1 参照)。この 22 の通婚世帯の中で世帯番号 a、d、f、g、i、p の場合は、M ガチャーに戸籍を持つが、常住はしていない。世帯番号 b、c、e、j、l、n、o は M ガチャーに常住している。世帯番号 m は、夫が漢民族の父とモンゴル民族の母を持つ「混血」で、M ガチャーと隣接するガチャーの人である。世帯番号 k は、夫を亡くした後 M ガチャーを出ている。世帯番号 h、q、r、s、t、u、v の女性は M ガチャー圏外に婚出している。

次項以降では、13 人の語りを中心に彼らはどのように通婚に至ったのか、彼らの通婚が牧畜にどのように関係しているのかを、調査対象となった通婚者をパターンごとに具体的な事例を提示しながら分析していく。家族相関図のアルファベットは表 1 の世帯番号である。

### 3.2 モンゴル民族男性と漢民族女性の通婚

M ガチャーにおいて、「混血者」は、モンゴル民族から「エルリス」と差別的に呼ばれることがある一方、モンゴル民族男性が漢民族女性との通婚によって生まれた子どもは聡明だと言われることもある。ここでは、2 組のモンゴル民族男性と漢民族女性の通婚事例を見ていく。

【事例 1】 世帯 a : BR(モンゴル民族男性、60 才)とその妻(漢民族女性、60 才)

＜BR の語り＞

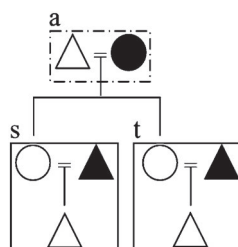
私はオルドス市・杭錦旗出身だ。私が生まれたガチャーに当時 20 戸ほど漢民族が住んでいた。父の話によると陝西省出身者が多いそうだ。妻と私は同じガチャー出身だ。私の故郷は半農半牧地域であり、人口が多くて土地が狭い。私の兄は 1977 年に退役した後オラド後旗の〇〇ソムの派出所に配属された。そしてここは土地が広くて人口が少なく生活しやすいことが分かり、結婚したばかりの私夫婦を呼び寄せた。当時私のような高卒の人は多くなかったため、放牧の仕事はもちろん、L 牧場の事務補佐をも務めていた。妻は勤勉な人だが、家畜の世話は得意ではなかった。家畜に飼料を与えることしか手伝えなかった。毛刈りなどの繁忙期は近隣の人に助けてもらっていた。妻は料理係を担当していた。

年を取って体力的にも衰えてきたので 2014 年に家畜を全部売り、東昇廟鎮にマンションを購入してそこに生活している。牧草地の補助金で生活していけるから。

### ＜BRの妻の語り＞

家畜の委託を介して彼の家族と信頼関係があったため、当時仲人が来て結婚の申し出をした際、両親が私に何も聞かず同意した。両親は今後ここで生活していく上でモンゴル民族と婚姻関係を結ぶのも悪くないと言っていた。オラドに来た後、いろいろ苦労した。彼がいないとモンゴル民族と言葉が通じなくて困っていた。ここでは誰が来てもミルクティーを出すのが一般的だが、私は美味しく作れないのでとても不安だった。家畜の管理は実家でモンゴル民族のやっているのを見たことがあるが、体験していないので一人で家畜管理をするのは無理だった。杭錦旗にいた頃、うちは農家だったし、十数頭のヤギを飼育していたが、それを夫の生家に委託していた。毛刈りをはじめ全般の管理を任せて、うちは委託料金を支払うだけだった。

現在町に住んでいるが、私と同じ年齢のモンゴル民族の女性はまだまだ家畜の放牧をして頑張っている。私は家畜の管理が苦手だったので、町に住むという選択をした。



〔図3〕 BRの家族相関図

凡例：△と○はモンゴル民族の男性と女性を、▲と●は漢民族の男性と女性を表す。

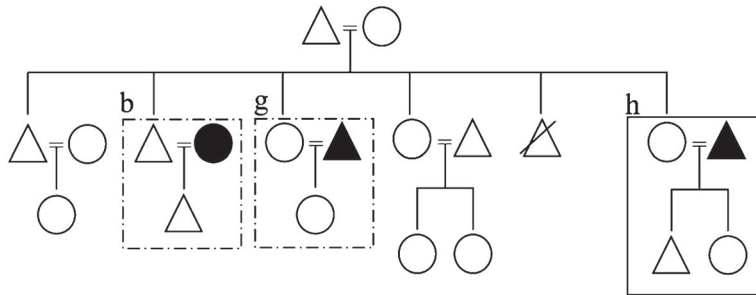
この事例では、BRは22才までオラド後旗より漢化が進んだオルドス市・杭錦旗にいたため、モンゴル文化と漢文化の2つの文化的背景を持っていた。家畜の委託を通じた家族同士の信頼関係が彼と妻の通婚における前提となっている。彼には兄の人脈があるためLガチャーの成員にもなれたはずだが、彼は家畜飼育のみで生計を立てるMガチャーを選択した。しかし、BR夫婦は「退牧還草」政策後、放牧をやめて補助金に頼る生活を選んだ。それはただ年齢のせいだけではなく、妻が放牧に長けていなかったことにも関係している。

### 【事例2】 世帯b：AL(モンゴル民族男性、45才)とその妻(漢民族女性、41才)

#### ＜ALの語り＞

妻は隣のガチャーの人だ。彼女は中学校を卒業後、両親を手伝って家畜の世話をしていた。私は勉強嫌いだったので高校に行くのを諦め、家畜の放牧をしていた。うちは妻の家と近かった(8キロほど離れている隣の世帯だった)ため、小さい頃からヒツジやヤギの毛刈り、去勢などの人手が必要な時に助け合っていた。また、正月に挨拶に行ったりしてヒツジやヤギを屠畜する際も招待しあっていた。こうしているうちに妻と結婚することになった。両親は、私の結婚に反対していなかった。人柄さえよければという態度だった。1998年の時点で結婚していれば牧草地の

割り当てがあるという決まりだったので、その年に結婚した。そして面積 11,000 ムー (1 ムー = 666.7 m<sup>2</sup>) の牧草地の使用権を 30 年の契約で手に入れた。現在、30 ムーほどの土地を耕してトウモロコシを栽培している。余った分のトウモロコシを必要とする人に販売する。今年はトウモロコシではなくヒマワリを栽培した。また妻はこの数年、家畜の糞だけを肥料として家庭菜園を作り、私の兄弟や隣人、東昇廟鎮に住む両親に分けている。余った分は販売している。私は妻の手伝いをしているうちに野菜を作る技術を身につけた。



〔図 4〕 AL の家族相関図

凡例：△と○はモンゴル民族の男性と女性を、▲と●は漢民族の男性と女性を表す。

#### ＜ AL の妻の語り ＞

結婚後、牧草地の割り当てを受ける際、ガチャー長に、いくつかの同じ面積の牧草地の中から選ばせたが、私が夫に農耕もできる土地をと、アドバイスした。農業を始めたこの十数年は毎年 7,500 kg のトウモロコシを収穫している。実だけではなく茎も家畜の飼料になるので損はしていない。夫の兄にトウモロコシの実と茎を分けているが、それというのも 50 頭くらいの小型家畜(注 15)を委託しているからだ。いわば労働交換だ。現在人々は健康志向になっているから今後菜園の面積を広げていきたい。

この事例では、AL と妻の結婚の特徴は家畜を通した近隣付き合いである。AL 夫婦は家畜を所有するものの兄に委託しており、放牧よりも畑仕事に取り組んでいる。彼がトウモロコシ栽培や家庭菜園、小規模な商売など漢文化的な生活要素を取り入れているのは、L 飼料基地の影響もあるが、漢民族の女性との結婚が大きく関わっているように思われる。AL は農業を始めて親戚や隣人と新しい関係を作り上げている。

同じ通婚パターンの BR と AL は、家畜を介した助け合いによって通婚に至っているが、漢民族の女性との通婚が牧畜の継続に影響を与えていることが分かる。

### 3.3 漢民族男性とモンゴル民族女性の通婚

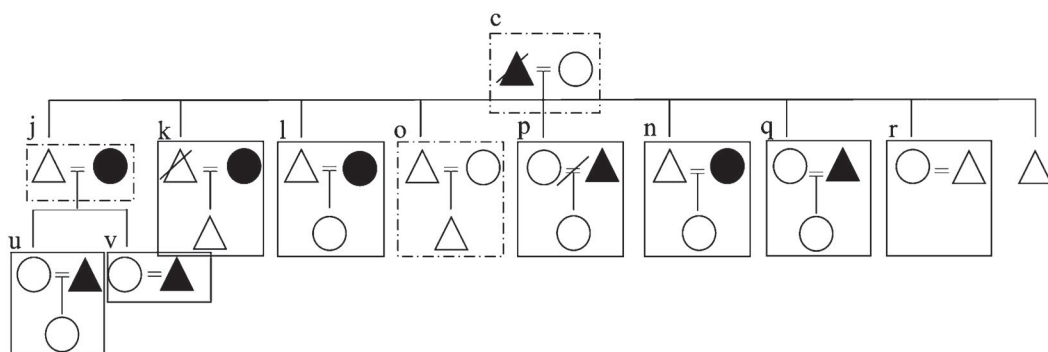
3.2 では、モンゴル民族男性と漢民族女性との通婚の事例を見たが、ここでは、逆の事例を見てみよう。

【事例 3】 世帯 c：RL(モンゴル民族女性、71 歳)

＜RL の語り＞

私はオラド・モンゴル人に養子に出され、生みの親もオラド・モンゴル人だった。夫は杭後旗(注 16)・召廟鎮の人で、1960 年に 16 才で高校を中退して、知識青年として L 牧場に配属された。最初は牧場の会計士の仕事をしていて、その後は人民公社(注 17)の供銷社の倉庫管理員を務めた。モンゴル民族の家に住み込み、ラクダや小型家畜の放牧の手伝いなど肉体労働もした。それを契機に、私たちは知り合った。文化大革命(注 18)後、多くの知識青年は故郷に帰ったが、彼はここに残ることを選んだ。当時、彼は、自分の生家よりもここが生活しやすいと言っていた。その当時、漢民族と結婚することは珍しいことだった。夫の父は、息子がモンゴル民族の女性と結婚することに反対していたが、夫はそれを押し切って私と結婚した。夫は亡くなるまで家畜の世話をしていた。

この事例では、知識青年であった RL の夫は、モンゴル民族の家で放牧の手伝いをするを通して、放牧の技術を身につけた。彼はほかの知識青年のように実家に帰らず、牧畜に従事することにした。彼の選択が RL との結婚につながったと考えられる。



〔図 5〕 RL の家族相関図

凡例：△と○はモンゴル民族の男性と女性を、▲と●は漢民族の男性と女性を表す。

【事例 4】 世帯 f：NR(モンゴル民族女性、41 才)とその夫(漢民族男性、47 才)

＜NR の語り＞

夫の家が L 牧場の近くに引っ越してくる前は、夫と会ったことがなかった。ある冬、父は群れ

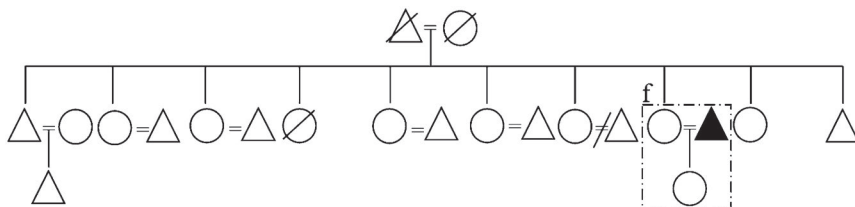


からはぐれたヒツジを夜遅くまで探して、夫の家に泊まったことがあった。それをきっかけに家族同士の往来が始まった。姉妹の中で私だけが漢民族と結婚した。父がお酒を飲み歩き何日も帰ってこないのを見て育ったので、飲んだくれに嫁ぐまいと思っていた。夫が家畜の管理をあまりできないことに不安はあったが、結婚してからはなんとかなった。

「退牧還草」政策で家畜の頭数が制限された上に、銅鉞(注 19)の地下水の大量使用によって井戸の水が減少して放牧が難しくなった。そのため、2010 年に、東昇廟に移り住んだ。現在、夫婦 2 人でメノウや肉従蓉などの販売や買い付けをする店を開いている。

#### ＜NR の夫の語り＞

父は家族を連れて 1958 年に甘肅省から夜逃げしてここに来たそうだ。最初は、国境線の近くに住んでいて、主にラクダの放牧をしていた。国境付近は交通が非常に不便で米や塩といった日用品を購入するためにラクダに乗って L 牧場まで行かなければならなかった。家から L 牧場にある供銷社までラクダで三日三晩かかっていたそうだ。父は持病があってしょっちゅう病院にかかっていた。不安を感じた父はガチャー長に願い出て、1980 年に L 牧場の近くに移り住んだ。私は中学校を中退した後、兄の知り合いの仲買人について羊毛やカシミアといった家畜生産品の買い集めの手伝いをして商売を覚えた。妻の実家の羊毛やカシミアをいい値段で買上げたことがあり、妻の家族から歓迎されるようになった。私は末っ子なのであまり苦労していないし、放牧の仕事も兄たちと比べてあまりできない方だ。結婚後、困った時には近くに住んでいる 2 人の兄に助けってもらっていたが、一番苦労していたのは妻だった。大黒柱として周りの目も気になって



〔図 6〕 NR の家族相関図

凡例：△と○はモンゴル民族の男性と女性を、▲と●は漢民族の男性と女性を表す。

いたので、井戸の水位の減少をきっかけに町に移ってきた。

この事例の NR 夫婦は両家族の往来をきっかけに付き合っている。NR 夫婦は、町に移り住むようになった理由について、「退牧還草」と井戸水の減少に言及しているが、NR の夫が放牧よりも商売が得意であることが大きいと言える。なぜならば、M ガチャーに NR 夫婦を含め、13 世帯が銅鉞の影響で井戸水の減少の被害を受けているが、11 世帯は依然として牧畜を続けているからである。

【事例 5】 世帯 g：MQ(モンゴル民族女性、41 才、世帯 b の夫である AL の妹)とその夫(漢民族男性、43 才)

＜MQ の語り＞

夫は杭後旗出身だ。私の実家は夫の叔父の家に近い。私は物心がついた頃から彼の叔父家族と放牧の繁忙期に労働交換をしていた。彼の叔父は何年か前から小型家畜の去勢の時期に山脈の南側の親戚を招待して睾丸料理をごちそうしていた。そして夫と何回も会ううちに意気投合して結婚に発展した。結婚時に、実家から婚資として 11,000 ムーの牧草地と 40 頭の小型家畜をもらった。家畜は、夫が放牧の仕事ができないので売って、マンションを購入する資金にした。

＜MQ の夫の語り＞

祖父の代に甘肅省から杭後旗に移住した。何年に来たかは分からないが、父は杭後旗に来てから生まれたそうだ。父の従弟が 1960 年代に L 牧場の飼料栽培の技術員になった。1980 年代に飼料栽培をやめ、自分の家畜を持ち、牧畜民になった。妻の人脈で M ガチャーに戸籍登録できたが、私は家畜の飼育については素人なので、杭後旗の蒙牛乳業で妻とともに働いている。妻名義の 11,000 ムーの牧草地があるが、現在飼育する家畜の頭数が制限されているので、家畜を飼育するよりも補助金をもらえるほうが得だと思う。

この事例の MQ の夫は、妻との結婚によって 11,000 ムーの牧草地と 40 頭の小型家畜を手に入れ、M ガチャーに戸籍登録までしている。しかし、彼は家畜管理に携わったことがなかったため、MQ 夫婦は放牧よりも出稼ぎを選択している。

RL、NR、MQ は近隣付き合いをきっかけとして漢民族の男性と通婚しているが、彼女たちの夫の牧畜の技術や経験が牧畜の選択を左右している。

### 3.4 「混血」男性と漢民族女性の通婚

ここでは、漢民族男性とモンゴル民族女性の混血男性と、漢民族女性の通婚について取り上げる。

【事例 6】 世帯 j：BJ(モンゴル民族籍の混血男性、52 才、世帯 c の妻である RL の長男)とその妻(漢民族女性、49 才)

＜BJ の語り＞

私は自分の半分はモンゴル民族で半分は漢民族であると考えている。何民族であるとはっきり意識したことはない。誰かと口喧嘩した時に、陰口として「雑種」、「エルリス」と言われることが多いし、妻と口喧嘩した時も「雑種」と言われることがある。少し悔しい気持ちになるが、モンゴル民族にもなれるし、漢民族にもなれるので得した気分になる時もある。よい生活さえしていれば

ば、何民族であるかは重要ではない。モンゴル民族になったら優遇政策を受けられる。私は「混血者」だが、「混血者」も人間であることに変わりはない。モンゴル民族と漢民族の通婚は民族団結の証であり、差別されるべきではない。

現在、100 数頭小型家畜、50 数頭ラクダ、10 数頭ウシ、1 頭のウマ、10 数頭のロバを飼育している。当ガチャーでモンゴル民族らしく五畜(注 20)を飼育している人は私しかない。

#### < BJ の妻の語り >

私は 6 人の姉妹、1 人の弟の 7 人兄弟だ。弟は養子だ。生家で力仕事が必要な時は、いつも夫の家族に助けを求めている。夫の生家と私の実家は 10 km ほど離れている。結婚する前、結婚相手の第一条件は M ガチャーの人であることだった。うちは弟が幼く、父は持病があったため、繁忙期には誰かの助けを必要としていた。そして夫の勤勉さが両親に気に入られ、結婚することになった。

私は去年(2014 年)に交通事故に遭って、杖をつかないと自由に歩けなくなった。親戚から町に出て療養したらと、勧められた。しかし、夫は、「私が妻と家畜の世話をするから」と言って、一人で頑張っている。

この事例の BJ 夫婦は、近隣同士の助け合いによって通婚に至っている。BJ 夫婦には、町に出て、牧草地の補助金で生活するという選択肢もあったが、牧畜を続けている。

BJ は自分が何民族であるかをあまり気にしていないと言いながらも、周りから差別的な言い方をされると、腹を立てている。彼は五畜を飼育してモンゴル民族らしさを見せ、「混血」というスティグマを払拭しようとしているのだと考えられる。また、モンゴル民族と漢民族の通婚に、政治的なスローガンにそって民族団結という意味を与えようとしている。

### 3.5 「混血」男性とモンゴル民族女性の通婚

本項では、漢民族男性とモンゴル民族女性の混血男性と、モンゴル民族女性の通婚について取り上げる。

【事例 7】世帯 o:JG(モンゴル民族籍混血男性、44 才、世帯 c の妻である RL の四男)とその妻(モンゴル民族、38 才)

#### < JG の語り >

私と妻は幼馴染だ。私も妻も中学校を卒業してから親の手伝いをしていた。妻と私の家は 35 キロほど離れている。妻の実家は国境に近くて、うちは L 牧場に近い。妻の実家の周りにササボク林があって毎年春になると一ヶ月ほど肉従蓉を掘っていた。その度に妻の家族にお世話になっていた。肉従蓉掘りが終わる 5 月上旬頃にカシミヤを取る時期も重なるのでその手伝いをした。

カシミヤは取る時期を逃して毛が剥がれ落ちたりすると値段が落ちるので、毛を取る手伝いをし、妻の家族に喜んでもらっていた。このような日常の付き合いを経て妻と結ばれた。

#### < JG の妻の語り >

実は、2002 年に插花移民(注 12 を参照)として M ガチャーを離れたことがある。家族 3 人で 13,500 元をもらった。このまとまった金を貯金に回そうと思っていた。東昇廟にアパートを借りて住んだ。有刺鉄線を引く仕事を夫婦 2 人で 3 年間やったが、食べ物に事欠く始末になった。貯金も底をついてしまった。そこで有刺鉄線の仕事をやめ、建設業関係の仕事をしたが、重労働の割に給料が低かったので半年でやめた。その後、銅鋳や、飲食店などの仕事を転々として一年ずつ働いたが、貯金できなかった。2009 年に結局 M ガチャーに戻ることにした。放牧以外の技術がない牧畜民は、町に出てもお金持ちになるところか生活が成り立たないと、身に染みるほど分かった。

この事例の JG 夫婦もお互いの助け合いを契機に通婚へと至った。JG 夫婦は生活向上を図ろうと 6 年ほど放牧をやめたが、放牧以外の仕事になじめず、放牧を再開している。

## 4. まとめと考察

以上において、モンゴル民族と漢民族の通婚を 7 世帯の 13 名の語りを中心に記述してきた。通婚のパターンから分かるように、モンゴル民族と漢民族の間に両方向的な通婚がみられる。M ガチャーにおいては、両民族間の通婚は、個人的な往来を日々の生活の中で繰り返した結果である。つまり、家畜の委託、放牧の繁忙期の助け合い、近隣付き合いなどによるものである。通婚に至った経緯は世帯によって多少異なるが、家畜をめぐる相互扶助関係が大きな役割を果たしている。また、通婚関係は、その後の牧畜をめぐる選択にも影響している。

7 つの事例を見渡すと、牧畜をやめて町に行くか、牧畜を続けるかという 2 つの選択に分けられる。

まず、牧畜をやめて町を選択した世帯 a の場合、オルドスの半農半牧地域から移住して、M ガチャーで放牧を始めるものの、「退牧還草」政策後、牧畜をやめて町で生活しはじめた。世帯 f の場合、井戸水の減少が呼び水になって、牧畜をやめて町で店を開いている。世帯 g の場合、夫が放牧の経験がないために、町で働いている。

次に、牧畜を続ける世帯 b の場合、直接牧畜に携わるのではなく、家畜を委託している。そしてトウモロコシ栽培や自家菜園をして農業を始めている。世帯 c の場合、知識青年であった夫は生家に戻らず、何十年も牧畜をし続けた。世帯 j は、妻の交通事故によって家畜の世話を 1 人でしなければならない状況下でも、牧畜を続けている。世帯 o の場合、貧困な生活から抜け出そうと一度牧畜を離れるが、失敗して牧畜を再開している。

ここまでモンゴル民族と漢民族の通婚と牧畜の関係を世帯ごとに見てきたが、世帯によって異なっていることが見出される。牧畜をやめる世帯の背景要因として、夫婦の間で牧畜の経験と技術に差があることが考えられる。一方、牧畜を続ける世帯に共通してみられるのは、夫婦両方に牧畜の経験とその技術が充分にあることである。しかし、世帯bの場合、牧畜の技術と関係なく、妻が放牧よりも農業を好むことによって家畜を委託という形で牧畜を続けている。

モンゴル民族と漢民族の生活空間の共有とそこに繰り広げられる彼らの相互扶助関係が民族のカテゴリーを超え、民族的他者を包括する地縁的連帯を生み出しているといえる。地縁的連帯は両民族間の通婚の前提となっているが、牧畜をめぐる選択の違いが示すように、必ずしも両民族の間あるいは漢民族の間で牧畜技術が均質であることを意味しない。ただし、地縁的連帯は両民族の関係を語る上で重要な視点となるだろう。

## 5. おわりに

本稿では、先行研究において議論されていなかったモンゴル民族と漢民族の通婚と牧畜の関係について、当事者の語りを中心に考察を試みた。本稿の事例を通して、牧畜地域におけるモンゴル民族と漢民族の通婚を可能としたのは、民族の違いを超えた地縁的連帯であることが明らかになった。これは、モンゴル民族と漢民族が混住する農耕地域におけるモンゴル民族と漢民族の通婚にも共通すると考えられる。しかし、牧畜地域の特徴として、「退牧還草」政策といった新しい社会状況に直面した際に、モンゴル民族と漢民族の通婚世帯において、漢民族の牧畜の技術や経験によって各世帯の牧畜をめぐる選択が異なっていることが具体的に明らかになった。つまり、牧畜を続けながら牧草地への補助金を得るか、それとも牧畜をやめて町へ行って補助金を得るかという選択に、漢民族出身の配偶者の牧畜の技術や経験の差が影響を与えている。

モンゴル民族と漢民族間の対立意識は、近代国家が形成される以前から現在まで継続しているが、モンゴル民族と漢民族の通婚率から見れば、それが彼らの通婚を妨げるほどのものではないと言える。漢民族が牧畜を始めたことと、モンゴル民族が河套方言を流暢に話すことから、漢民族のモンゴル民族化と、モンゴル民族の漢民族化が同時に双方向的に生じていることは言うまでもない。そして本稿の事例から明らかになった地縁的連帯関係は、モンゴル民族と漢民族の通婚を両民族の対立構造における「漢化」として捉えがちな先行研究では得られなかった知見である。

ここで提示した事例は、一つのガチャーを対象としたものである。従って本稿は、あくまで内モンゴルの牧畜地域におけるモンゴル民族と漢民族の通婚の一端を捉えたものであることを付け加えておく。その全体像を把握するために、今後は、各牧畜地域のモンゴル民族と漢民族の通婚の特徴を追求しつつ、モンゴル民族と漢民族の民族間関係について新しい理論を見出すことが重要である。



## 付記・謝辞

本稿で用いた資料は、平成 25 年度総合研究大学院大学学長賞と日本学術振興会特別研究員奨励費(平成 27 年度～平成 29 年度)の助成を受けて実施した現地調査の一部に基づくものである。本稿の執筆にあたって国立民族学博物館の池谷和信先生と藤本透子先生および人間文化研究機構の理事である岸上伸啓先生からご指導をいただいた。ほか、諸先生方から有益な助言をいただいた。また、調査に協力してくださった方々に心から感謝致します。

## 注

- (1) ウラドという表記は定着しているが、本稿ではモンゴル語の発音により近いオラドと表記する。
- (2) ここでは、他民族と血縁・姻戚関係のない民族のことを指す。
- (3) オランの意味については、モンゴル研究者の中で諸説があるが、職人という解釈が最も有力な説として認識されている。
- (4) 「双権一制」とは、一つのガチャーにおいて、牧草地の所有権はガチャーにある一方で、使用权はガチャー成員に分与され、成員が牧草地を 30 年の期間で請負う制度のことである。
- (5) 「退牧還草」政策とは、2003 年に実施した生態環境の回復のため、家畜の放牧をやめさせ、牧草地を草原に戻すという政策であり、「放牧禁止」、「家畜頭数制限」と「生態移民」を基本としている。
- (6) 中国で、1958 年～1961 年に実施された、農工業の大増産を目標に、人民公社設立など集団化を推進した文化大革命の先行的政策である。この政策は全国的な飢饉の発生により失敗に終わった。
- (7) 「辺境地域支援」政策については、リンチン(2015: 154～175)を参照。
- (8) 知識青年とは、社会主義国家建設のため、1950 年から文化大革命が終わるまで都市部から農村部へ移り住んで働いた青年たちのことである。なお、文化大革命期の状況については本稿で扱う M ガチャーの形成過程に大きなかわりはないため詳述しない。
- (9) 当時、日常生活用品を販売する商店のことを供銷社と呼んでいた。
- (10) 総人口、世帯数について、ガチャー長が提供した統計データと、オラド後旗の農牧局関係者が提供した統計データと多少異なるところがあるが、大きな差が見られなかった。世帯数とその世帯の牧草地の面積が照らし合わされた後者のデータを本稿では参考にした。
- (11) 「挂名戸」とは、戸籍に登録されているガチャーには住んだことがないが、牧草地の分配を受けられる人々を指す。その牧草地は禁牧対象になった人の場合と同じく補助金の対象となる。「挂名戸」が M ガチャーにどれくらいあるかは公開されていない。13 世帯という数字は、(10)で言及した 2 種類の統計データから割り出したものである。
- (12) オラド後旗においては、2003 年の「退牧還草」政策に先立ち、2000 年から「插花移民」政策が実行された。插花移民とは、生活向上のため一つのガチャーの中から貧困世帯をいくつか選び、彼らを生活しやすい環境に分散させる政策である。M ガチャーでは当初は插花移民世帯に対して、放牧せず、牧草地の補助金の対象外であるという条件付きで一人当たり 4,500 元が支給された。しかし、移住先や職は自分で探さなければならないという政策上の不備があった。插花移民 17 世帯の中ガチャーに戻ってきた世帯もある。政策上、本来は插花移民対象者に牧草地の補助金は支給されないが、彼らの移住先での生活が移住前よりも困窮している現状を考慮して、旗政府は 2003 年の「退牧還草」政策が実施された後に插花移民を生態移民に切り替え、牧草地の補助金を支給するようになった。
- (13)、(14) 白福英(2017)を参照。
- (15) 小型家畜とは、ヒツジ、ヤギを指す。大型家畜とは、ウマ、ウシ、ラクダを指す。
- (16) 杭錦後旗のこと、オラド後旗に隣接し、同じくバヤンノール市の管轄である。
- (17) 人民公社とは、1958 年にできた行政機構と合作社が合体した一つの社会組織である。
- (18) 1966 年～1976 年の約 10 年間、中国全土に繰り広げられた政治運動のことである。
- (19) 正式な名称は「西部銅業公司」であり、M ガチャーの南部より 30km 離れたところに位置する。
- (20) 五畜とは、モンゴル民族によるヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシ、ラクダの総称である。

## 参考文献

### 【日本語】

オンドロナ

- 2006 「多民族混住地域における婚姻と民族意識の関連—内モンゴル赤峰市地域のモンゴル族と漢族の族際婚姻を中心に—」『北東アジア研究』(10): 105-128。

オンドロナ

- 2007 『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究』広島：溪水社。

児玉香菜子

- 2012 『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代の変容：オルドス地域農耕民とゴビ地域遊牧民の事例』名古屋：アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会。

西澤治彦

- 2004 「費孝通の『中華民族多元一体構造』論をめぐって」、瀬川昌久編『「中国研究」の可能性と課題』(東北アジア研究シリーズ 6) 109-123、仙台：東北大学東北アジア研究センター。

鄭国全

- 2004 「内モンゴル自治区の農耕地域におけるモンゴル族と漢族の共存形態—赤峰市寧城県の場合」『新地理』(51): 13-23。

白福英

- 2017 「内モンゴル・オラド後旗のラクダ牧畜の現在」『季刊民族学』(161): 87-100。

リンチン

- 2015 『現代中国の民族政策と民族問題—辺境としての内モンゴル』福岡：集広舎。

### 【中国語】

包智明

- 1991 「变动中的蒙民生活—三爷府村实地调查」『社会学研究』(1): 52-57。

马玉明

- 1997 『内蒙古资源大辞典』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

马戎、潘乃谷

- 1988 「赤峰農村牧区蒙汉通婚的研究」『北京大学学报』(3): 76-87。

茉妮

- 2008 「蒙汉通婚与民族融合—呼和浩特市个案」『科教文汇』(7): 228-230。

费孝通

- 1989 『中华民族多元一体格局』北京：中央民族大学出版社。

纳日碧力戈

- 1991 「呼和浩特蒙汉通婚现状析要」阮西湖主编『都市人类学』、225-228、北京：华夏出版社。

纳日碧力戈・王俊敏

- 2000 「族际家庭与族际通婚—呼和浩特蒙汉通婚」李中清等主编『婚姻家庭与人口行为』、108-124、北京：北京大学出版社。

李晓霞

- 2004 「中国各民族间族际婚姻的现状分析」『人口研究』(3): 68-70。

陆南泉

- 2009 「中苏经贸关系简析(1949～1991)」关贵海、栾景河主编『中俄关系的历史与现实』(第2辑)、478-493、北京：社会科学文献出版社。

翁独健主编

- 1984 『中国民族关系史研究』北京：中国社会科学出版社。

『乌拉特后旗志』编纂委员会

1992 『乌拉特后旗志』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

『乌拉特后旗志』编纂委员会

2005 『乌拉特后旗志』呼和浩特：远方出版社。

『乌拉特后旗地方志』办公室编

2013 『乌拉特后旗年鉴』呼和浩特：内蒙古新闻出版局。

【モンゴル語】

m. batusūke (M・バトスヘ)

2004 urad-un qoyitu qosigun-u genel sacuranggui teūke. urad-un qoyitu qosigun-u ulus törü-yin jöblelgen-ü oron nutug-un soyul teūke-yin matEriyal-i nayiragulqu Komis urad-un qoyitu qosigun-u soyul teūke.(qoyadugar emkidkel)  
(「オラド後旗の輝かしい歴史」オラド後旗政治協商会『オラド後旗文史』(第二集)、249-259、出版社不明。)

参考ウェブサイト

内蒙古自治区人民政府公式 HP：www.nmg.gov.cn、2019 年 4 月 1 日に閲覧。